

日本人と外国人がともに進める地域防災の取組事例

地域に住む日本人と外国人の方々が、災害が起きたときのことについて一緒に話し合いを行った取組をご紹介します。

概要

- ・実施地域: 鶴見区潮田西部地区
- ・日時: 令和7年10月26日(日)14:00~16:00
- ・場所: 横浜市国際学生会館ホール(鶴見区)
- ・参加者: 日本人 14人、外国人 15人

話し合いの様子

言語や文化の違いから起こる誤解や行き違いについて、解決の方法や、どうすればそのようなことが起こらないようにできるかを参加者で話し合いました。

2011年の東日本大震災で、情報が得られずに不安を感じる外国人被災者の姿が見られたことや、予期せず外国人被災者が集まった多くの避難所で、言葉や文化の異なる外国人被災者の対応に苦慮したという避難所運営者の声も聞かれた体験をもとに、(公財)仙台観光国際協会[旧・(公財)仙台国際交流協会]が作成した教材を使用しました。

参考: (公財) 仙台観光国際協会ウェブサイト



日本人と外国人を含む、5~6人のグループを6グループ作りました。



各グループで司会役を決め、話し合いを進めていきます。



災害時の場面を再現した台本を使い、参加者が登場人物になりきって、セリフを読みます。



セリフを聞いた後、参加者が感じたことを話し合いました。

参加者の意見

①やさしい日本語やジェスチャー、翻訳ツールを使ってみる

- 日本人はやさしい日本語で話しかけることを心がけ、外国人は災害時の言葉など日本語をもっと勉強する、などお互いに頑張れるといいな。
- 普段からジェスチャー力をつけておくとも良いかも。
- スマートフォンやポケットウオッチを活用する。



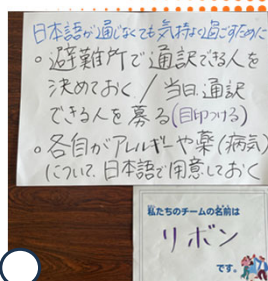
②言葉ができる人を頼る

- 避難所内で、外国人で日本語ができる人、日本人で外国語ができる人に協力してもらおうと思います。



③日頃からの準備が大切

- アレルギーや病気など命に関わることは、事前に日本語で書いた紙を用意しておき持ってくる。
- 通訳できる人を見つけておくのも大事。



④役割を決めてみんなで解決できるように

- 同じ国・地域の出身者のグループを作り、リーダーを決めて、みんなが避難所で気持ちよく過ごすことができるような体制を作ると良いのでは。



話し合いを終えて

潮田西部地区自治連合会 中村会長からのコメント

「できる」ではなく、「できそうなこと」をみんなが考えたら良い知恵につながる

話し合いを始める前と終えた今、みなさんの気持ちが少し変わったのではないのでしょうか。それは、参加したみなさんが話し合っ、通じ合うものがあったからだと思います。私はこの話し合いを通じて、日本人、外国人問わず「災害時に自分ができること」を見つけることができれば期待していました。災害時に、自分が「できる」ではなくて、「できそうなこと」があると思っているといい知恵が出てくるのではないのでしょうか。

